一人ひとりが自立し、ともに生きる力をどう育てるか

―自分らしく生きることを考える実践を通して―

Ⅰ　研究の実践

１　授業実践

「自分のよさを見つけ、互いに個性を認め合うことができる子の育成」

２　啓発活動

Ⅱ　研究のまとめ

第１６分科会
両性の自立と平等をめざす教育

角谷　容子　（碧南・棚尾小）

研究の概要報告

１　愛知の「両性の自立・平等教育」

「両性の自立・平等教育」は、「両性の自立・平等教育推進委員会」の提言をもとに、人権教育の一環として子どもの自立をめざした教育の研究をすすめてきた。

近年「男女共同参画社会」という言葉も世の中に浸透し、女性の社会進出はめざましくなってきた。育児・介護にかかわる制度も充実してきている。また、男性が「主夫」として働いたり、育児休業を取得したりというように生き方も多様化している。反面、依然として旧来の性別による固定観念が残っており、少なからず子どもたちに影響を与えていると考えられる。価値観が多様化した現代だからこそ、性別にとらわれることなく、子どもたちには自分に自信をもち、自分らしさを大切にした生き方をしてほしいと願っている。

そこで、子どもたちが性別にとらわれずに友だちのよさを認め、自分のよさにも気付いて自信をもつことのできる子、また、自分の考えをもち行動する力を身につけることで、自分らしい生き方ができる子をめざしてテーマを設定した。

２　テーマ　　一人ひとりが自立し、ともに生きる力をどう育てるか

―　自分らしく生きることを考える実践を通して　―

３　研究のねらい

「男女共同参画社会」とは、一人ひとりが互いにその人権を尊重しつつ、責任を分かち合い、性別にとらわれることなく、その個性と能力を発揮できる社会である。現代社会において、一人ひとりが輝いて豊かに生きるためには、それぞれが一人の人間として、自分らしく生きることが大切である。

研究対象である小学校２年生は、社会的男女の概念にとらわれず、自己中心的な子が多い。しかし、そのような幼さを残しながらも、善悪についての理解と判断ができるようになる時期でもある。また、心の発達にも個人差があり、発達の早い子は男女の違いを感じ始める子もいる。ジェンダーをはじめとするさまざまな固定観念に、まだ強くとらわれていないこの時期に、学級活動や道徳などの活動を通して多様な価値観があることを認識させたい。友だちとのかかわりを通して、家族や学校、社会の中での自分を見つめ、自分のよさをどう生かすかを考える場を設定することは、自分らしく生きる姿勢につながると考える。そして、自分の役割や行動が周りによい影響を与えられるよう、目的意識をもって活動するとりくみを推奨することで、自分に自信をもって行動できる子どもが育つと考える。

そこで本研究において、他者とのかかわりや理解を深める活動を通して、性別にとらわれることなく、互いのよさを認めて協力していくことの大切さに気付かせるとともに、他者に認められたり、必要とされたりすることで、自己肯定感を高めさせたい。そして、一人ひとりが自分は大切な存在であると実感し、自らの個性や能力をいかして、自分らしく主体的に生きていこうとする子どもを育てていきたい。

４　研究の方法

（１）自立の教育にむけての実態調査

・自分のよさ、友だちのよさについての認知度　・児童が抱いている性別に対する認識

（２）授業実践　　小学校２年生（学級活動　道徳）

「自分のよさを見つけ、友だちの個性を認め合うことができる子の育成」

（３）啓発活動

①　教員への啓発活動

・「愛知母と女性教職員の会」での提案及び分散会における話し合い

・「女性部報」、機関誌「はりみち」への関連記事掲載

・単組・支部での学習会

②　保護者への啓発活動

・「愛知母と女性教職員の会」での提案及び分散会における話し合い

（４）まとめ

・成果と今後の課題

Ⅰ　研究の実践

１　授業実践

小学校２年生　学級活動　道徳

「自分のよさを見つけ、互いに個性を認め合うことができる子どもの育成」

（１）　めざす子ども像

小学２年生の子どもたちは、男女の概念にとらわれず、その時の気分や興味関心により、友だちと結びついたり離れたりして流動性がある時期である。そのため、グループで遊ぶこともできるが、自己中心的な子が多い。しかし、そのような幼さを残しながらも善悪についての理解と判断ができるようになる時期でもある。また、心の発達にも個人差があり、男女の違いを感じ始める子もいる。そんな子どもたちが「男だから…」「女だから…」といった既成概念を意識し始める前に、「男女のこだわりなく、互いの個性を認め合うこと」の知識や感性の涵養が大切であると考える。また、自分と周りの人との違いに気付き、自分というものを考え始める中学年の時期の前段階として、「自分のよさ」や「互いの個性」に気付けるような授業を計画的に実践することで、「自分のよさを見つけ、自分らしさに自信をもつことができる子」「友だちの個性を大切にし、互いに認め合うことができる子」をめざしていきたい。

そこで、両性の自立・平等教育のめざす「男女共同参画社会～男女が互いにその人権を尊重しつつ、責任を分かち合い、性別にかかわりなく、その個性と能力を発揮できる社会～」に生きる人間を育てるために、この小学２年生段階でめざす姿として、次の２点に重点をおいて、実践をすすめていくことを大切とする。

ア　自分のよさを見つけ、自分らしさに自信をもつことができる子ども
イ　友だちの個性を大切にし、互いに認め合うことができる子ども

（２）　子どもの実態

本学級の子どもたちは、男女の性別を意識することなく、仲よく過ごすことができている。休み時間には、クラス全員で鬼ごっこすることもよくある。係活動では、男女で協力してとりくむことができる。学級の中にはブラジル国籍の子が２名いるが、同じクラスの仲間として分け隔てなく学校生活を送っている。その反面、些細なことでけんかになってしまうこともよくある。その原因の多くが自分の気持ちをうまく伝えられなかったり、相手のことを考えて行動できなかったりすることである。喧嘩が原因で、自分に自信がなくなり、何に関してもやる気が起こらなくなってしまう子もいる。

そこで、「他者とのかかわり合いの中で、自分を見つめる活動」、「お互いに個性を認め合う活動」を通して、自己肯定感や自分らしく生きようとする意識を高める実践を行うことで、「自分のよさを見つけ、自分らしさに自信をもつことができる子」「互いに個性を大切にし、お互いに認め合うことができる子」を育てることができるのではないかと考えた。

本実践のめざす子ども像に迫るための実態調査として、以下の事前アンケートを行った。

①　新しいならび方（男女混合）をどう思いますか。
②　次の仕事は誰がやる仕事だと思いますか。
③　自分の好きなところはありますか。
④　友だちのすごいところやがんばっているところは、どんなところですか。

事前アンケート①の結果より、男女混合の並び方に対して２７人中１３人の子どもが「いい感じ」と答えており、違和感をもっている子は少ないことがわかった。しかし、②より「サッ

カー選手」「宇宙飛行士」は男性の仕事、「ピアニスト」「ケーキ屋」「看護師」は女性の仕事と考える子が多く、職業に関して既成概念をもっている子がいることがわかった。また、③より自分の好きなところが「ない」と答える子が１３人もいた。その一方で、友だちのよさは見つけることは全員ができたが、学習面で秀でている子に焦点をあてる傾向にあった。

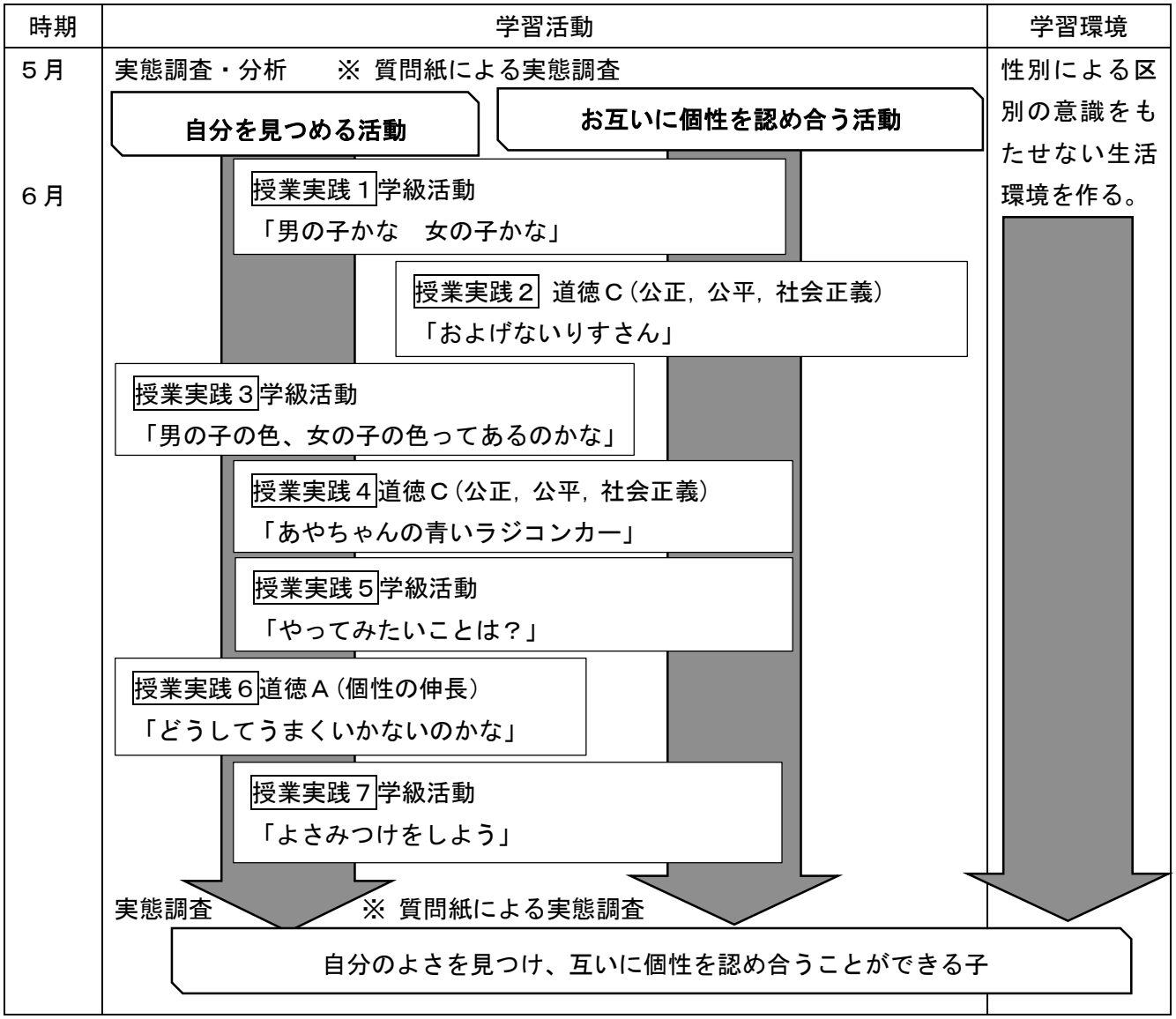
Ａは男女混合の並び方に違和感をもっており、「１年生は男の子と女の子でわかれていたから、まちがえちゃいそう」と書いており、男女別で並ぶ考えが定着していることが見受けられる。また、自分の好きなところも「ない」と答えており、自己肯定感が低い。Ａがこの授業実践を通してどのように考えが変わるかを追っていきたい。

（３） 実践の手だて

自分のよさを見つけ、互いに個性を認め合うことができる子にせまるために

○ 「考えたい」「話し合いたい」という意欲を高める課題設定をする。
○ ペア対話を取り入れ、自分のことを話しやすい雰囲気づくりをする。
○ 多様な意見にふれられるよう、交流の場を設定する。
○ 活動のあとに振り返り活動を設け、価値づけを行うようにする。

（４） 実践の様子



【学習環境】　性別による区別の意識をもたせない生活環境を作る。

本年度から男女混合名簿を使用することを始めた。それに伴い、子どもたちの並び方や座席も男女に分けることがなくなった。名前シールも昨年度までは男子は青色、女子は赤色のものを使用していたが、全員青色のシールに統一した。男女混合名簿にすることで、学校生活のさまざまな点で変化があったが、子どもたちは自然と男女混合や男女統一の学習環境にすぐに馴染み、違和感を感じる様子は見られなかった。事前アンケートでも、２３人の児童が男女混合の並び方に対して「いい感じ」「なんとも思わない」と答えていることから、低学年の時期から性別による区別を意識させない生活環境を作ることの大切さを感じた。

また、子どもの呼名も、教員が「～さん」で呼ぶことを徹底すると、自然と子どもたちもお互いを「～さん」と呼び合うようになった。

【授業実践①】　学級活動「男の子かな　女の子かな」

互いに個性を認め合うためには、まずはそれぞれの体のつくりや感じ方が違うことを理解しなければならないと考えた。そこで、授業実践①では、男女の体の違いを理解し、その上で、男の子も女の子も大事な存在であることを理解することをねらいとした。初めに、赤ちゃんの人形を子どもたちに見せ、「この赤ちゃんは男の子かな、それとも女の子かな」と質問した。すると、「髪の毛が短いから男の子」「かわいいから女の子」などの意見が出てきた。そこで、人形の服を脱がし、「男の子か、女の子かわかるかな」と聞くと、全員が「男の子」と答えた。「どうして、男の子ってわかったの」と質問すると、「ちんちんがついているから」と答え、他の子どもたちも頷いていた。そこで、性器はとても大事なところだということを話し、養護教員がプライベートゾーンについてと、おとなになると男性は筋肉がついてくること、女性は体が丸くなってくることを、家族を例にして話をした。男女で体に違いがあることを知った子どもたちに「どうして、男の人と女の人の体はちがうのかな」と問いかけてみた。すると、「男の人は会社とかで働いて、力が強くないといけない」「女の人は子どもを産む」「女の人は料理が上手だから、上手に作れる体になっている」という意見が出てきた。そこで、「男の人と女の人とで体に違いがあるみたいなんだけど、どうしないといけないかな」と聞くと、「どちらも大事だから、協力しないといけない」「協力って一緒にやるってことだよね」という意見が出てきた。授業の振り返りには、「おもしろかったけど、体のだいじなべんきょうになりました。男の人も女の人もどっちもだいじ。」など、体の違いを理解し、両性とも大事な存在で協力しないといけないと書いている子がたくさんいた。

Ａも振り返りで「女の人も男の人も　やっぱりだいじなんだなと思いました。みんなが　きょう力しないと　たいへんだなと思いました。」と書いており、男女が協力していくことの大切さに気付くことができた。発問が難しく、始めは理解できない子もいたが、クラス全体で話し合うことで考えを広げることができた。また、子どもたちの意見から、男性は「髪の毛が短い」「会社で働く」、女性は「かわいい」「料理が上手」などの既成概念がすでに児童の中に存在していることもわかった。

【授業実践②】　道徳「およげないりすさん」Ｃ（公正、公平、社会主義）

授業実践①で「体に違いがあっても、協力することが必要」という考えをもった子どもたちに、「具体的にどのようなことをしたらよいか」を考えさせたいと考えた。そこで、授業実践②では、道徳の教科書から「およげないりすさん」の教材を取り上げた。本教材は、泳げないことを理由にりすを仲間はずれにしてしまったあひる、かめ、白鳥たちが、不公正さに気付き、りすを仲間として迎え入れる姿が描かれている。「つれていって」というりすに対して、他の三匹が「泳げな

いからだめ」という場面では、子どもたちから「いじわる」というつぶやきが聞こえた。３匹は島に着いても、ちっとも楽しくない心情や次の日にカメの背中にりすを乗せて島に向かう３匹の心情をクラス全体で考え、話し合うことができた。「最初から、カメの背中にりすを乗せてあげればよかった」という意見が数人から出た。最後の「ちがうところがあっても、みんながなかよくすごすにはどうしたらいいかな。」という発問に対して、「話し合う」「一緒に考える」という意見がたくさん出てきた。Ａもワークシートに「ちがうところがあっても　いっしょにあそべる　ほうほうを考える。」と書いており、違いがあっても、お互いを理解するために話し合ったり、一緒に考えたりすることの大切さに気付くことができた。

【授業実践③】　学級活動「男の子の色　女の子の色ってあるのかな」

実践①で、子どもたちの中にも既成概念が存在していることがわかった。そのため、身近なものから男女の既成概念について考えてみようと思った。

実践③では、子どもたちの持ち物であるシューズ袋とランドセルを使って、自然と身についてしまっている既成概念に気付かせ、自分らしさについて考えさせることをねらいとした。

導入で青色とピンク色のシューズ袋を用意し、「誰のものか」を尋ねた。すると、青いシューズ袋には男の子の名前が、ピンクのシューズ袋には女の子の名前がどんどん出てきた。そこで、「どうして青色には男の名前ばかり、ピンク色には女の子の名前ばかり出てきたのか」を聞くと、「青だから男の子、ピンクだから女の子」と子どもたちは答えた。そこで、「男の子の色　女の子の色ってあるのかな」と板書すると「あるよ」と声を出す子もいれば、じっと考える子もいた。実際に子どもたちが持っているシューズ袋の色を聞くと、男子は「青、白、黒、黄、緑」女子は「ピンク、水色、白、赤、オレンジ、紫」の色があげられた。ランドセルの色は、男子は「青、茶、黒、紺」女子は「茶、赤、ピンク、薄紫」があがった。これを見て、「男子は暗い色、女子は明るい色」「男子は青っぽい色、女子はピンクっぽい色」という意見が出てきた。そこで、どうやってシューズ袋やランドセルの色を決めたのか問うと、シューズ袋は「ママと選んだ」「お母さんが選んだ」という子が多くいた。ランドセルは自分で選んだ子が多くいたが、中には「パパがこれがかっこいいからって選んだ」「お兄ちゃんと同じ色だから」という子もいた。そこで、「みんなの本当に好きな色を紹介しよう」と呼びかけ、自分の好きな色をぬった画用紙を全員分、黒板に貼り、どうしてその色が好きか理由を聞いた。水色は男女ともに好きな子がおり、男の子からは「かっこいいから」女の子は「海の色できれいだから・明るい色で好き」という意見が出てきた。Ａも好きな色は「水色」で、理由は「さわやかな色だから」とワークシートに書いていた。赤色の好きな男の子からは「燃える感じがして好き」、紫色の好きな男の子からは「好きな色を持っていると気分がいい」と既成概念にとらわれない意見が出てきた。子どもたちが女の子の色と認識していたピンク色が好きな男の子が１人いたが、話し合いがすすむと「〇〇さんのピンクもいいね」という子も出てきた。授業の振り返りでは、「はじめは色がかんけいあると思ったけど、水色とか赤色とか女の子も男の子も好きな子がいたから色はかんけいないと思いました」「暗い色の好きな女の子もいる」「すきな色はたくさんのりゆうですきなんだな」という感想が書かれていた。これらの振り返りから、多くの子が、人それぞれ好きな色があり、理由もさまざまあるということに気付いたことがわかる。

男女混合の並び方に違和感をもっていたＡであるが、振り返りには「男の子も女の子も色はかんけいないんだな。」と書いており、Ａも色については男女の枠にとらわれずに考えるようになったことがわかる。

【授業実践④】道徳「あやさんの青いラジコンカー」C（公正、公平、社会主義）

実践③で色に関する性による既成概念はなくなってきた。そこで、実践④では、その他の物事にも性による既成概念をなくすことをねらいとした。そこで、男女共同教育教材「しょうたくんとあやちゃん、どうしたらいいかな？」の「あやちゃんの青いラジコンカー」をもとに、本学級の実態に合うようにお話を作出した。

あやさんが一番大事にしている青いラジコンカーに対して、しょうたさんが「女の子が車のおもちゃが好きなんておかしいよ。青は男の色だよ」と答えたことや将来は車を作りたいと思っているあやさんに対して「車を作るのは男の人の仕事」と答えるしょうたさんに、あやさんが怒ってしまう。そのときのあやさんの心情を「男の人も女の人も仕事はできるよ」「なんで女の人が車を好きじゃだめなの」「悪口を言われた」と子どもたちは想像した。そして、「しょんぼりしているしょうたさんにどんなことを教えてあげたいか」と発問に、「男でも女でもどっちでもいいんだよ」「悪口を言ってはいけないよ」「仕事はだれがやってもいいんだよ」などの意見が出た。「女の子だから～」「男の子だから～」という考え方は悪口になると考える子が多くいた。最後に、「自分と考えが違ってもみんなと仲良く過ごすにはどうしたらいいかな」と聞くと「悪口を言わない」「応援してあげる」という意見が出た。Ａも「悪口を言わず『そうなんだね、おもしろいね』って言ってあげる」と意見を発表した。この意見から、たとえ考えが自分と異なっても友だちも受け入れようとするＡの心情が感じられる。

他の子どもたちの振り返りでも「じぶんとかんがえがちがっても友だち」「友だちの考えを聞いて、なかよくする」「考えがちがってもわるロとか言わない」などがあり、Ａと同様に考えが自分と異なっても偏見をもたず、理解し合おうとする姿勢が見られた。

【授業実践⑤】学級活動「やってみたいことは？」

実践④で子どもたちから職業についての意見が出てきたので、実践⑤は職業に関する性による既成概念について考えてみようと思った。性別に関係なく、自分の好きなことややりたいことを見つけ、自分にあった生き方をしようとする心情を育てることをねらいとした。事前に将来やってみたい職業を子どもたちに書かせると男の子では警察官、女の子はケーキ屋さんが一番多かった。そのことを紹介し、全員のやってみたい職業を書いた紙を黒板に張り出した。子どもたちからは「男の子は～の選手が多い」「女の子は～屋さんが多くて、特に食べ物屋さんが多い」という意見が出た。実践①から「男子は力が強くなければならない」「女子は料理が上手」という既成概念が存在することがわかっていたが、やりたい職業にもこの既成概念が影響しているように思われた。そこで、男の子と女の子の札を入れ替えて、どう感じるかをペアトークで話し合わせた。「野球の選手に女の人はいないよ」「男のケーキ屋さん？」「男の人がドーナツ売るかな」「サッカー選手で女がいるのは知ってる」と口々に自分の経験や知識から話をし、ペアトークが盛り上がった。その後、女性のサッカー選手、野球選手、白バイ警官、警察官、男性のパテェシエ、ドーナツ屋の写真を見せながら説明すると、子どもたちは１枚１枚に「え、いるの」「いるよ、知ってる」などの反応を見せた。また、単元の前に行った事前アンケート②で性別による既成概念がはっきりと見られた「ピアニスト」「看護師」「宇宙飛行士」にも触れた。最後に、金子みすゞの「私と小鳥とすずと」の朗読動画を見せた。詩の内容は、２年生には難しそうであったが、最後の２行「すずと小鳥とそれからわたし　みんなちがって　みんないい」の部分だけ、もう一度みんなで音読した。授業の振り返りでは、「一人ひとり違うこと」「性別関係なく、いろいろな仕事をすることができること」「自分に合った生き方をしてよいこと」を書いている子が多くいた。

自己肯定感が低く、将来やってみたい職業も「考え中です」と書いたＡであるが、振り返りには「女の人も男の人もいろいろなしごとができるんだな。体がちがっても、何でもできる人げんってすごいなと思いました。ぼくも早くじぶんのやりたいことを見つけたいな」と書き、「じぶんのやりたいことを早く見つけたい」という気持ちが芽生えたことがわかる。

【授業実践⑥】道徳「どうしてうまくいかないのかな」　Ａ（個性の伸長）

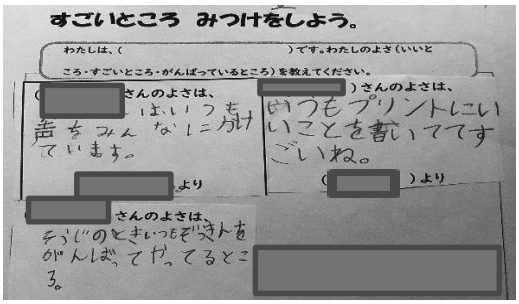
Ａの振り返りにあった「自分のやりたいことを見つける」には、自分自身を見つめ、自分のよさを見つけることが必要だと考えた。そこで、実践⑥では自分自身を肯定的に受け止め、よさに気付き、伸ばしていこうとする心情を育てることをねらいとした。そこで、道徳の教科書から「どうしてうまくいかないのかな」の教材を取り上げた。本教材は、何をやってもうまくいかないと悩む主人公が母や祖父の声かけによって、自分のよさに気付いていく主人公の心の変容が描かれている。めあてに「じぶんのよさを見つけよう」と板書すると、「でも、ぼく、いいとこないよ」とつぶやく子もいた。「今から見つけていくから大丈夫」と声をかけると安心した様子だった。子どもたちは、がんばっているのに物事がうまくいかない主人公の気持ちを自分の経験と重ね合わせながら、「何でできないんだろう」「もっとうまくできたらいいのに」と想像した。その後、母や祖父からの頑張りを認める声かけにより前向きに気持ちを切り替えた主人公のみきさんに対して、「みきさんはどうして自分のことを好きになってきたのでしょう」と発問すると「じぶんのよさがわかった」「うまくいかなくても、おじいちゃんのことばですきになった」「がんばったらいい」「がんばる自分が好きになった」という意見が出てきた。このことから、自分のよさは自分を肯定的に受け止めることで見つけることができると子どもたちが考え始めたことがわかる。

次に、「自分のよさを見つけてみよう」と呼びかけ、自分自身のよさをワークシートに書き出してみることにした。２年生の子どもたちには、自分を客観視することが難しく、なかなか書き出すことができな子もいた。「自分がだめだなと思っていたところがみきさんみたいによさに変わるかもしれないよ」と声をかけると、子どもたちは少しずつ自分のよさをワークシートに書きこみ始めた。Ａも自分のよさをすぐには書き出せずにいた。一度は「絵がじょうずなところ」と書きこんだが、しばらく考えた後、「じぶんにきびしいところ」と書き直した。その理由は「じぶんにきびしくすると、がんばれるから」とした。絵が上手なところもＡのよさであるが自分について考える時間を長く設定したことで、さらに自分の内面にまで考えを深めることができたと思われる。Ａは授業の振り返りで「じぶんのよさは、さがせばいっぱい見つけられるんだなと思いました。」と書いている。自分の意識次第でよさがどんどん出てくることを実感し、自分のよさを認め、自己肯定感が高めることができた。そして、授業の最後に自分のよさを発表し合うことで、「じぶんもみんなもじぶんのよさがあるんだな。だから、わたしもよさがあるんだな」とだれにでもよさがあることに気付く子も出てきた。

【授業実践⑦】学級活動「よさみつけをしよう」

実践⑥でだれにもよさがあることに気づく子が出てきたことから、実践⑦では友だちのよさをみんなで見つける活動をすることにした。この活動によって、互いに個性を認めることと友だちに認めてもらうことで自己肯定感をさらに高めることをねらいとした。導入で、だれにでもよさがあることに気付いている子の振り返りを全体に紹介した。そして、めあてを「友だちのよさをみつけよう」と板書すると「あるよ」とつぶやく子が多くいた。今回は、常に一緒に活動することが多い生活班の友だちのよさを見つけることとした。

子どもたちは、友だちのよさをカードに１枚ずつ書きこんだ。子どもたちの様子を見ていると、すぐにカードに書きこむことができ、友だちのよさにはよく気付いているようだった。カードを書いた相手に届け、自分に届いたカードはワークシートに貼らせた。届いたカードをじっくりと読み込む児童がたくさんいた。その後、友だちから届いたカードを読んだ感想を書かせた。Ａは「じぶんがほめてもらうとすごくうれしいです。みんなに声をかけてくれるって読んだときは、すごくうれしかったです。そうじのぞうきんがけもべんきょうもいっしょうけんめいがんばります。」と感想を書いた。子どもたちの振り返りを読むと、自分では気付かなかったよさを知ることができたことがわかった。また、振り返りの子どもたちの言葉には友だちに認めてもらった喜びや感謝の気持ちがあふれていた。多くの子が他者から認めてもらうことで、さらに自己肯定感が高まり、次への意欲にもつながっていることがうかがえた。



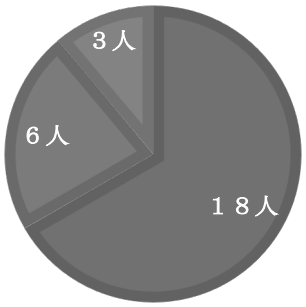
【Ａのよさが書かれたワークシート】

（６）　実践のまとめ

①事後アンケート結果（男子＝15 人、女子＝12 人）

①　新しいならび方（男女混合）をどう思いますか。
②　自分の好きなところはありますか。
③　新しく友だちのすごいところやがんばっているところを見つけることができました

①男女混合のならび方をどう思いますか。



●どうしてそう思いますか。

いいかんじ

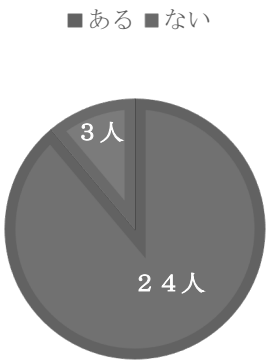
- **男の子も女の子もかんけいないから。**
- **男の子と女の子がまぜまぜでもへんじゃないと思う。**
- **ごちゃごちゃだと、なんかふつうです。**

何とも思わない

- **女の子も男の子もどっちも関係ないから。**
- **男の子も女の子もかんけいないし、友だちだから何と も思わない。**
- **女男どっちも人げんだから、いっしょでいいでしょ。**

へんなかんじ

②じぶんのすきなところはありますか。



●「ない」から「ある」に変わった児童の自分の好きなところ
●

・声をかけられるところ。
・そうじをがんばっている。
・みんなに「うんどうしんけいばつぐん」って言われました。
・足がはやい。やきゅうで、バッティングがいいから。
・ラキュー（ブロック）が上手に作れること。考えて作るのが大すきだから。

③ 新しく友だちのすごいところやがんばっているところを見つけることができましたか。
（記述）

・わからないじゅぎょうがあったとき、（自主的に）のこってべんきょうしています。
・まどがかりで、先生に言われなくても、あつさのちょうせいをしてくれること。
・日本語をがんばっていていいね。（外国人児童に対して）
・みんなががやがやしているとき、「しずかにして」と声をかけて、すごいなと思います。
・いつもわたしがこまっているとき、教えてくれるね。

事後アンケート結果より、①の男女混合の並び方に対して「いい感じ」と感じる子が増えた。また、「いい感じ」と感じる理由に事前アンケートでは「おもしろい」という理由が多かったが、事後アンケートでは「男女平等だから」という趣旨のものがほとんどであった。「何も思わない」と感じる子に関しても理由が事前と事後で明らかに違った。事前アンケートでは「べつにどんな並び方でもいい」と無関心だった子が「男の子と女の子まぜまぜになっていいから」と「男女平等」の考えから「何も思わない」と感じていることがわかった。また、事前アンケートでは「変な感じ」と感じていたＡが事後アンケートでは「いい感じ」に変わった。理由は「ごちゃごちゃだとなんかふつうです」と答えている。本実践を通して、「性別は関係なく、みんな友だち、みんな同じ人間」という考えが広まったと考える。

自分のよさを見つけ、自分らしさに自信をもつことができる子について

事後アンケート②より、自分の好きなところが「ある」と答えた子が１４人から２４人へと増えたことがわかる。自分の「すきなところ」には実践⑦で友だちが教えてくれた自分のよさを書いている子が多かった。Ａも事前アンケートでは、自分の好きなところは「ない」と答えており、自己肯定感が低かった。事後アンケートでは「ある」と答えており、「声をかけられるところ」と書いている。Ａも実践⑦で友だちから「Ａさんは、いつもみんなに声をかけています」とコメントをもらったことで自己肯定感を高めることができたと考えられる。また、じっくりと自分のよさについて考える時間を設けたことで、子どもたちは自分の内面のよさに気付いたり、自分の好きなことに自信をもち、それを自分のよさと認識したりできた。

互いに個性を大切にし、お互いに認め合うことができる子について

事前アンケートでは学習面に焦点をあてる子が多く、特に授業で活躍している友だちのよさを見つける傾向が強かった。しかし、事後アンケート③からはさまざまな場面で友だちのよさを見つけていることがわかる。また、友だちのよさを伝え合うことで、お互いの「よさ」を認め合うこともできた。

今後は、学校生活の中で「自分のよさ」をいかすことができる場面を設定し、子どもたちが「自分のよさ」を発揮できるようにしていきたい。そして、「自分らしく」活動することが「かっこいい」「すてきだな」と感じる子を育てていきたいと思う。

２　啓発活動

(1)　学習会　＜適時＞

両性の自立・平等教育についての啓発活動を効果的にすすめられるよう、学習会で利用できるプレゼンテーション用資料を作成し、希望する各単組・支部に配付している。有意義な学習会が開催されているとの報告を受けている。

９月には、「男女がともに輝ける社会を」というテーマで、学習会を開催した。男女共同参画社会の実現にむけて、制度面、意識面、そして「両性の自立と平等をめざす教育の実践」について提案し、参加者とともに学習を深めた。意見交換を通して、性別に関係なく個性や能力を発揮できる社会の実現のためには、わたくしたちおとなが自分自身の意識改革を行い、日々の教育活動や家庭生活の中で、子どもたちに自立して生きる力を育むことが大切であると確認し合った。

２月には、青年部・女性部合同学習会を開き、本年度授業実践を行った「両性の自立・平等教育」の成果と課題について男性を含む青年教員とともに、話し合う場を設けている。

(2)　愛知母と女性教職員の会　＜10 月＞

「２１世紀をになう子どもたちのために　～心に寄り添い育もう　自分らしく生きていく力を～」のテーマのもと、男性の参加者も交え、「愛知母と女性教職員の会」を開催した。全体会では、本実践を中心とした「両性の自立・平等教育」についての提案を行い、その後、「こうすれば、叱らなくても子どもは伸びる～その具体的な方法とは？～」と題して、親野智可等さんの講演会を行った。分散会では、提案や講演を受けて「自分らしく生きること」「子どものために保護者として教職員としてできること」というテーマで話し合いを行った。「まずはおとなが『女の子だから』『男の子だから』などの思い込みをなくさなければいけない」などの意見が出された。最後に〖これからわたしは！宣言〗として、全員がこの会で得た思いを書き、子どもへのかかわり方や、今後の自分の生き方についての決意を固めた。

(3)　「女性部報」、機関紙「愛教」、機関誌「はりみち」に掲載

日々の実践に活用していけるように、愛教組連合のめざす自立の教育についてのとりくみを全組合員に情宣している。

Ⅱ　研究のまとめ

１　授業実践による成果

これから子どもたちをとりまく社会は大きく変化していくといわれている。そんな時代だからこそ、子どもたちには、男女という性別の枠にとらわれず、自己実現していく力をつけてほしいと考える。

そこで、研究テーマである「一人ひとりが自立し、ともに生きる力をどう育てるか―自分らしく生きることを考える力をどう育てるか―」をめざして、小学校２年生を対象に実践を行った。「自分のよさを見つけ、自分らしさに自信をもつことができる」と「互いの個性を大切にし、お互いに認め合うことができる」の２点に重点をおき、「自分のよさを見つけ、互いに個性を認め合うことができる子」をめざした授業実践を展開した。実践後のアンケートから、「自分の好きなところがある」と答えた児童の人数が増え、「自分の好きなところ」には、友だちからお教えてもらった自分のよさをかく子が多くいた。また、友だちのよさに関しても学校生活のさまざまな場面での友だちのよさを見つけることができるようになった。よって、２年生なりの個性を認め合うことができた点で、一定程度評価できるものとなった。

２　啓発活動による成果

「学習会」「愛知母と女性教職員の会」の開催や、「女性部報」、機関紙「愛教」、機関誌「はりみち」による情宣活動を通して、各単組・支部では、次のようなとりくみがすすめられた。

・　両性の自立・平等教育の実践の試み
・　性別による固定観念にとらわれない子どもへのかかわり方の試み
・　保護者への「自分らしく生きる」ということについての問題提起

３　今後の課題

・　性別による固定観念をとりのぞき、自分らしさを発揮させるために、各校の実態や発達段階に応じた年間計画を立案し、授業実践に継続してとりくんでいくこと。
・　「男女共同参画社会」の実現にむけて、教育現場でのとりくみ方についての研究を深め、学習する機会を増やしていくこと。
・　性別による役割分業意識や固定観念をもつおとなの意識改革を地道に行い、子どもたちに反映することのないよう、機会あるごとに啓発していくこと。
・　両性の自立にむけたとりくみに、男性の参加をさらに促していくこと。
・　人権教育の一環として、両性の自立・平等教育に今後もとりくんでいくこと。